

「気の毒だ」という心情へと、しばしば発展している。場面、状況によって、この一語から読み取られる心情は違ってくる。多義性と曖昧さを備えた語とも言える。また、婉曲表現を好んだ、平安の女流文学に、「あいなし」が多く用いられているが、「あいなし」の多義性曖昧さが、婉曲性と結びついた結果であると言えないだろうか。

補注

注(1) 『源氏物語』は、日本文学全集(小学館)に拠る。

その他の作品は、すべて、日本古典文学大系(岩波書店)に拠る。

熊本県鹿本郡植木町の方言研究

二十八回生

高木ちか子

目次

序論

第一章 植木町の方言文法―動詞―

第二章 植木町方言調査による特徴的な語の分布と概観

結び

序論

人々は地域社会において、いかなる言語生活を営んでいるのだろうか。年齢・性別・職業等の違いが実際の言語生活に与える影響に着眼して、ここでは筆者の出身地であり、熊本方言の中核でもある鹿本郡植木町を調査地点に選び、

参考文献

『源氏物語語義の研究』 山崎良幸(風間書房)

『平安女流文学のことは』 木之下正雄(至文堂)

『源氏物語におけるあいなし』についで

行本とよ子(国語学論説資料第一三号第四冊)

『源氏物語における「あいなし」考』

河島知子(四三年度熊本女子大学卒業論文)

植木町における言語生活の実状を明らかにする。と同時に熊本方言全般にわたって現状を克明にしたいと思ひ、ここに植木町の方言をとりあげたのである。

第一章 植木町の方言文法―動詞―

動詞の活用

活用形の名称はなるべく教科文典のそれと関係づける様心がけた。

形態上差があるため、未然形を否定形と将然形に分ち、形態上差がないところから終止形に連体形を含め、ある程度話し言葉に合わせた。

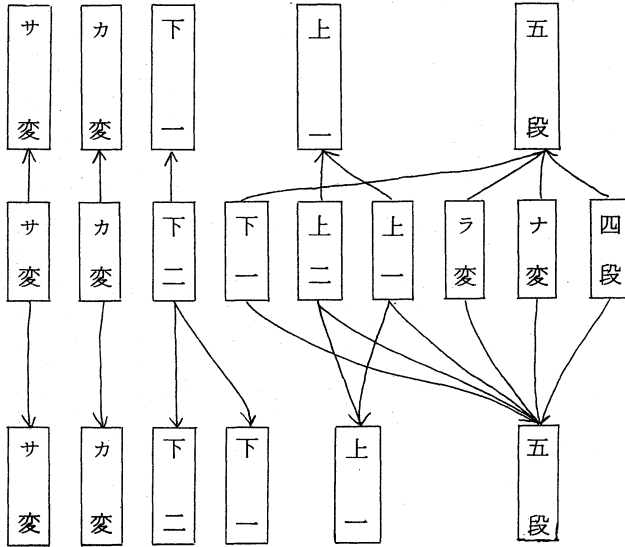
動詞活用表

す る	来 る	出 る	教 <small>おしそ</small> え る	着 る	起 き る	蹴 る	死 ぬ	咲 く	基 本 形					
○	○	○	オ シ ソ	キ	○ オ キ	オ ケ	シ	サ	語 幹					
セ	サ	コ	デ ラ	エ	ラ	キ ラ	キ ラ	ナ	か ん	否 定				
シ ユ ー	シ ー	コ ー	デ ー	ユ ー	ロ ー	キ ロ ー	キ ロ ー	ノ ー	コ ー	將 然				
シ	キ	デ	エ	リ	キ リ	キ リ	ニ		キ ま す	連 用				
シ	キ	デ	エ	(キ)	キ ッ	キ ッ	ツ	ン	イ た	完 了				
ス ッ	ス ク ル	ク ル	デ ル	デ ル	エ ル	ユ ル	ツ ル	キ ツ ル	ツ ル	ル	ヌ ヌ ヌ ツ ル	ク	終 止	
ス レ	ク レ	デ レ	エ レ	ユ レ	レ	キ レ	キ レ	ヌ レ	ネ	ケ ば	仮 定			
シ ロ	セ イ	コ イ	ケ ロ	デ レ	デ ロ	エ ロ	エ ロ	レ ロ	キ ロ レ	キ ロ レ	キ レ ロ	ネ	ケ	命 令
サ 変	カ 変	ダ 下 一	ヤ 下 二	ラ 五	カ 上 一	ラ 五	カ 上 一	ラ 五	ナ 五	カ 行 五 段	活 用 の 種 類			

共通語

文語

植木方言



A 活用形略記

命令形はヨ(起キヨ)を用いることはなく、専らレ(起キレ)、ロ(起キロ)を使う。

文語で下一段活用の「蹴る」は五段活用である。

「死ぬ」は終止形(死ヌル)と仮定形(死ヌレバ)に古形を残しているが五段活用に統一されつつある。

上一段活用の「起きる」、「着る」は連用形がそれぞれ起キリます。着ります、とも活用するので五段活用にもなる。

下二段活用の動詞は口語では下一段活用に転じているが、九州方言だけは下二段活用のままで残っている。

B、活用形の用法

①否定形 否定法ン、使役法スル・サスル、受身・自発可能及び尊敬法のルル・ラルル、スラスが下接する。

②未然形 単独で意志表現に当る他、助動詞では様態法ゴタル・助詞では勧誘の終助詞バイ(早オ行コバイ)、イ(早オ行コイ)などを下接させる。

③連用形 願望法タカ、可能法キル、ダス打消・推量法ミヤア、尊敬法ナル、補助用言的なクダハル、ナハル、ヨル、接続助詞テ、ナガルなどが下接し得る。

④完了形 過去法タ及び接続助詞テを下接させる。

⑤終止形 終止法の他、推量法ジャロ、ゴタルをはじめ終助詞、接続助詞の殆どを下接させる。

⑥仮定形 接続助詞バを下接させる。この方言では完了形仮定法(行ッたら)、終止形仮定法(行クト・行クトシ

ヤガ・行^レナラ)の勢力が大きい。

①命令形 単独で命令法に当る他 終助詞ヨ(早オ行^レヨ)・ヤなどを下接させる。この方言では、連用形命令法(早オ行^キナハリ・行^キナッセ・早オ起^キライ)の勢力が大きい。

第二章 植木町方言調査による特徴的な語の分布と概観

『日本語地図』の二八五項目すべてにわたって調査を行なったが、そのすべてを論述することは紙面的に無理であるし、またそれ程の特徴も見られず、論ずる必要のない項目も多いのでそれらは省く。

そこで、ここでは二八五項目のうち、ある程度特徴がみられ、述べるに値すると思われる項目を抽出し、年齢層を中心として分類し、論じていこうと思う。

〔注〕

①文章中における方言形はすべてカタカナとする。

②省略形として、老人の男性は老・男、町の中年は町・中、農村の青年は農・青などとする。

(一) 老年層と中・青年層で言い方の違う語
家(一九一)、なめくじ(二三九)

(二) 老・中年層と青年層で言い方の違う語

火事の音韻(三)、眩しい(三十)(三一)、片足跳びをする(五四)(五五)、△天秤棒をV担ぐ(六七)、△二人でV担ぐ(六八)、眉毛(一一一)、竹馬(二四四)かぼちゃ(一八〇)、案山子(一九〇)、ふくろう(二二)

蛙(二一八)、かまきり(二二九)、つらら(二六二)、

ほうほう(ふくろうの鳴き声)(二九八)(二九九)

(三) 老年層、中年層、青年層でそれぞれ言い方の違う語
肩車(一四九)、かたつむり(二三六)

(四) 年齢に関係なく方言が使われる語

ものもらい(一一二)、かかと(一一九)、井戸(九七)

裂片(二四九)、旋風(二六四)

(五) その他特徴のある語

おてだま(一四五)、かど(一九六)(二九七)、梅雨(二五四)、一昨晚(二七七)、昨晚(二七九)

以上あげた二八項目について、次にくわしく論じていく。語末の()の数は『日本語地図』の調査項目番号である。

(一) 老年層と中・青年層で言い方の違う語

〔家〕 農・老がエ、町・青がウチ、他はイエと言う。

『日本語地図』の分布からするとイエ類はウチ類より古い分布と考えられる。それはイエ類は東日本と西日本に分布し、ウチ類は関東のみに分布するからである。イエ類のうちイエが近畿、中国、四国、九州東部に、エ・エーが東日本と和歌山、九州中南部にそれぞれ分布している。エとイウのはイエがつづまったのであろうか。調査結果から見ると植木でも一般にイエが使われていることがわかる。

〔なめくじ〕 農・老がハダカナメクジで他はナメクジと言う。ハダカナメクジと言う理由は、カタツムリとナメクジは元来同じものであって、カタツムリのことをナメクジと言うため、「なめくじ」は「かたつむり」の殻がとれ

たものとして、ハダカナメクジと言ったのであろう。全体の傾向としては共通語に統一されつつある。

(二) 老、中年層と青年層で言い方の違う語

〔火事の音韻〕 カジのカは老・中ではクワ、青年ではカと発音する。ただし町の人はすべてカと発音する。

『日本語地図』をみるとクワ、と発音する地域として東北、北陸、九州があり、かなり広く分布している。分布状況からみても古い発音であることがわかる。植木町の傾向としては、青年がすべてカであり、また中・老年層にもカを使う人がいることからカの勢力が強くなりつつあるといえる。

〔まぶしい〕 マバイカが一般的で老人にマバユカ、メバイカと言う人がいる。又青年はマブシカが多い。

『日本語地図』をみれば、共通語形が使用されている地域は主として関東地方であって、その領域は案外と狭い。関西、中国、四国、九州はマバイカの勢力がかなり強い。

植木では表現法はいろいろあるが、皆同一類だとみなす事ができる。

この調査結果から、やはり若年層ほど共通語に近くなっているといえるが、「カ語尾」の勢力は以前として強い。

〔かたあしとびをする〕 カタアシトビを中・老はスツケンギョと言ひ、青はケンケンと言ふ。

スツケンギョというのは昔の童歌から出たものであるらしい。

ケンケンはヒトケンケン、アシケンケン、ピッコケンケ

ン等から上略が行なわれた形だと思われる。(『日本語地図』五四・五五図参照)

植木では青年層がスツケンギョをまったく使わないし、中年層にもケンケンを使う人がいるところから、この語はケンケンに統一される傾向にある。なお動詞の形で求めることが出来なかつたが、一般には助詞を抜かしてスツケンギョスル、ケンケンスルと言ふ。

〔△天秤棒をVかつぐ・△二人でVかつぐ〕 ①△天秤棒をVかつぐ、②△二人でVかつぐ、として比較表を作ってみた。

農村・老年	イナウ	①	ナカズル
町・老年	ニナウ		ナカズル
農村・中年	イナウ		ナカズル・ニナウ
町・中年	イナウ		イナウ
農村・青年	カタゲル・カタグル	○(無答)	カツグ・カタグル
町・青年	○(無答)		○(無答)

表からもわかるようにナカズル以外は①と②の言い方はほとんど区別しない。

『日本語地図』をみればカタゲル・カタグル類は九州東部と対馬に分布する。ナカズルは九州西部にある。九州ではナカズルはイナウにとり囲まれているところから、前者は後者より新しい表現と考えられる。

〔まゆげ〕 老・中はマユゲ、マイ、マイゲ、ミヤールなどと言ひ、青はマユと言ひ。これらを分類するとマユ、マユゲ類、マイ、マイゲ類、ミヤール類の三つになる。マユの音韻変化したミヤールは中・男しか使わなひ。

田中正行著の『方言の分布と性格』に、熊本市ではマイ、マイゲ、鹿本郡ではマユゲ、県下全域でミヤールゲを使用するとあるが、町の老・中はマイ、マイゲを使うという調査結果から、ともに熊本市の影響を受けていると思われる。

〔たけうま〕 老・中はアツサゲ、サゲアシ、サギアシなどと言ひ、青はすべてタケウマと言ひ。アツサゲ、サゲアシ、サギアシはどれも驚足からきている。ほっそりとした長いサギの足にたとえたものと思われる。

『日本語地図』をみれば、アシサゲは九州に多く、岩手にも一地点みられる。またサギアシ、サゲアシは日本のほぼ全域に分布する。とりわけサギアシは東日本に多く、サゲアシは九州に多い。

青年層がタケウマとしか言わなひところから、共通語化の傾向にあるといえる。

〔かぼちゃ〕 老・中はポーブラ、青はカボチャと言ひ。ポーブラはポルトガル語 *abobord* に由来すると言われ、カボチャは同じく *camdia abobord* の下略であると言われる。(荒川惣兵衛『外来語辞典』(一九六七))

『日本語地図』をみればポーブラ類は北陸、中国、四国、九州など主として西日本に分布するが東日本でも秋田に集中的にみられる。

植木ではポーブラの勢力も依然として強いが一般的傾向としてはカボチャに統一されつつある。

〔かかし〕 老・中はほとんどカガシ、青はカカシという。ただし中にはオドシと言ひ人もある。カガシは県下では鹿本郡などで用いられ、オドシは全域に使われる。

カガシの語源についてはたとえば『俚言集覧』によれば「……本獣肉を焼炙りて串に挟み立てその臭をカガシメておとろかす故に、カガシと云といへり……」とあるように「嗅ぐ」を源とする。これよりカガシとカカシ(案山子)の語源は異なるといえる。

植木では一般的傾向としては、共通語化の傾向がみられるが、この語は農村で使われる語であるため、カガシの勢力も続くと考えられる。

〔ふくろう・ほうほう(ふくろうの鳴き声)〕
フクロウのことを老・中はコゾ(ドリ)、青はフクロウと言ひ。ただし町・老・中はフクロウとコゾを併用する。

コゾというのは、フクロウの鳴き声からきている擬声語である。『日本語地図』をみれば九州一円コゾ類を使う。

一方ふくろうの鳴き声を老・女はコゾコゾカレクソクウカと言ひ、その他ゴロクトゴシヨ、コゾコゾ、ホーホーなどと言ひ。カレクソクウカと言ひのは「枯糞食うか」という意味であろうか。又ゴロクトゴシヨは「五、六斗五升」ではないかと思われる。この語は『日本語地図

図』から鳥取に八地点あるものと大分、宮崎、熊本にあるものとに二大別できる。

この鳥は今でも見かけることも少ないし、その鳴き声も聞かないので、教育、マスコミ等の影響を受けこれからますます共通語を使う場合が多くなると思われる。

〔かえる〕 老・中はワクド又はタンギヤク・ビキなどと言ひ、青はワッコ又はカエルと言ひ。ワクド、ワッコ、タンギヤクはすべて鹿本郡で使われている方言で、ビキは県下全域で使用されているものである。(『方言の分布と性格』参照) 鹿本郡ではヒキガエルのこともワクド、ワッコと言ひが、植木ではカエルとヒキガエルとは、はっきり区別しているので混乱はみられない。

調査結果にみられるカエルは、はじめから使われていたのではなく、共通語の影響と思われる。しかもそれも青年のうちのわずかである為、相変らず方言の勢力の強い語であるといえる。

〔かまきり〕 中年以上はほとんどオガメと言ひ、青はカマキリと言ひ。『方言の性格と分布』によれば、本来鹿本郡はオガメが普通に使われるが、熊本市では「オガマニヤトーサン」という言い方もする。町・老がそう言うのは、熊本市の人との交流があつたためかと思われる。

一方、老年層にもカマキリがはいってきているところから、この語も共通語化の傾向にある。

〔つらら〕 老、中はホダレ、青はツララと言ひ。『物類称呼』(一七七五)に氷柱(つらら)のことを西国(九

州) 近江辺にて「ほだれ」と言うところあり、今でも県下ではかなり広い地域に残っている。ホダレは「氷垂れ」のなまつたものであり、一方ツララは張りつめた氷のことで意味が違ふ。

中年層にもツララと言ひるところからこの語も共通語化の傾向にある。

(二) 老年層、中年層、青年層でそれぞれ言い方の違う語
〔かたぐるま〕 老はオッピヒヨウニノセルとかカタグルマなどと言ひ、中年はテングルマと言ひ、青はカタグルマのみを使う。

テングルマは手車の転じたものと考えられる。

名詞十助詞十動詞の形で言い表わして、特別な名詞の呼び名のない地域が県下には多くみられるが、オッピヒヨウニノセルもその一つであろうかと思われるが、他に例をみないので詳しい事はわからない。

植木では主にカタグルマとテングルマが使われているが、テングルマが老人に見られず中年だけに用いられるのは、おもしろい現象である。老人の使うカタグルマと青年のものとは同一の発生のものか否かが問題である。たぶん老人のものは、九州北部に残存していた以前からのもので、青年のものは共通語からきているものであろう。植木には、はじめはカタグルマを使っていたが、途中で他地方からの影響を受けテングルマが介入したため、中年だけがテングルマと言ひ、そのあと共通語の影響で青年はカタグルマと言ひようになつたのではあるまいか。この語についてはさらに

の影響を受けたと考えられる。

「つゆ」 老人のなかにはナガシと言う人もいるがほとんどツユと言う。

『全国方言辞典』にナガシ・ナガセについて「梅雨」の意味の他に「晩夏・初秋の頃に降りつづく雨」の意味を載せてある。これより「梅雨」そのものを指すツユとはやや性格が違ふように思われる。

「いつさくばん、さくばん」 サクバンのことを層に關係なくユーベ（ヨーベ）と言ったりキノンバン（マエンバン）と言う。

この調査結果によると、サクバンとオトトイノバンの使用の方に根本的意味の混乱をきたす恐れがある。昨晚をユーベと言った人は一昨晚をキノンバンと言う。一方昨晚をキノンバンという人も多い。そしてそれが年齢、地域などまゝで關係なく入り混じっている。これではいろいろなコミニケーションの上で誤解が生じるであろう。『日本語地図』の分布からすれば九州全域は、昨晚のことをキノンバンと言ひ、安定しているようにみえるが、実際少なくとも植木ではそうではないことがこの調査で明らかになった。

結 び

植木町の言語生活における表現法は年齢に關係なく、割合共通して方言形を用いる。が、語彙面では若年層はかなり共通語化の傾向がみられ、教育、マスコミ等の影響を免れ

ることはできない。言い換えれば「テレビやラジオは共通語の理解を高めることに影響を与えるが、話すことにはもつとほかの条件が加わらないと進まない。ほかの条件とは共通語で話をしなければならぬような場をできるだけ多く経験するということである。つまり機会に出るとか、ほかの地域、ことに東京の人と話をするとか、東京へ出るとかなどの経験がものをいうのである。」と紫田武氏もその著『日本の方言』のなかで述べておられる。

方言形として残したいものに、例えば「ふくろうの鳴き声」などがある。『日本語地図』の分布をみれば、その鳴き声から、土地土地で様々に想像をはたかせた人々の心情が思われるようだ。

一方意味上の混乱をきたすものは共通語化の必要があると思われる。例えば「昨晚」と「一昨晚」の關係である。これから先、植木においても増々共通語化の傾向がみられると思うが、その際正しい方言の理解こそが共通語化のうえでも最も重要なことだと考える。

参 考 文 献

- | | |
|-----------|---------|
| 日本語地図 | 国立国語研究所 |
| 方言研究法 | 藤原 与一 著 |
| 熊本県方言資料篇 | 田中 正行 著 |
| 方言の性格と分布 | 田中 正行 著 |
| 地域社会の言語生活 | 国立国語研究所 |
| 肥後の方言 | 秋山 正次 著 |
| | 桜 楓 社 |

岐阜県方言の研究
肥後方言由来記
方言と方言学

奥村 三雄 編
田中 正行 著
東條 操 著

大衆書房
稲本報徳舎
春 際 堂